内モンゴル仏教寺院の伽藍配置計画について

SANGAHARAMA ARRANGEMENT PLAN OF INNER MONGOLIA BUDDHIST TEMPLE

エンケホルワ^{*1}, 夏目欣昇^{*2}, 濱田晋一^{*2}, 麓和善^{*3}*ENKE HAORIBAO, Yoshinori NATSUME, Shinichi HAMADA,
and Kazuyoshi FUMOTO*

The Tibetan Buddhist temples that were built after the 16th century in the Mongolian plateau are an indispensable element in the process where Mongolians settled down from nomadic life. Further, they are relatively well preserved. Because they were built with the strength of the entire social strata, and thus became a crystallization of the Mongolian economy, culture, art, and construction technology after the Yuan dynasty, there is great value and significance to researching them. This study aims to clarify the characteristic arrangement plan of the Inner Mongolian temple.

Keywords : *Tibetan Buddhist, Temple Level, Temple Architecture, Arrangement Plan*

チベット仏教, 寺格, 寺院建築, 配置計画

1. 序論

モンゴル高原では、紀元前の匈奴の時代には土城の建設が既に始まっていたが、戦火の波及により、多くが取り壊され、砂土に埋もれ、数少ない城壁の一部だけが遺跡として残されている^{注1)}。しかし、遊牧生活を送ってきたモンゴル人の定住化の過程に欠かすことができない重要な要素である寺院建築は、他の歴史的建造物より比較的多く現存している。元朝以後のモンゴル地域は、現在の中国の内モンゴル自治区（以降、内モンゴル）及び新疆ウイグル自治区、そして、モンゴル国、並びにロシア連邦の中のブリヤート共和国、トゥヴァ共和国、及びカルムイク共和国など幅広い地域に相当する。資料によると、19世紀までに、内モンゴルでは1,200件以上、モンゴル国では700件以上の寺院が確認でき、内モンゴルだけでも僧侶の数は10万人を超えていた^{注2)}。これらの寺院は社会の各階層の力を結集して建てられたもので、当時のモンゴルの経済、文化、芸術、建築技術の結晶となっており、これを体系的に研究することは重要な意味を持つ。ところが、ソ連型社会主義と中国の文化大革命などによる宗教弾圧により、これらの国や地域における仏教寺院の多くが破壊された。そのような中で、内モンゴルに建てられた仏教寺院が数多く残されたことは不幸中の幸いである。

内モンゴルはモンゴル地域の南側に位置し、当時のモンゴル地域の仏教寺院の発祥地でもあり、中国やチベットの寺院建築の影響を多く受けたことで、建築意匠的な面でモンゴルのみならず、東アジアの建築歴史の中でも重要な存在である。そのため、本稿では内モンゴルにおける寺院に絞って研究を行う。

内モンゴルの仏教寺院建築に関する先行研究は、20世紀と21世紀初頭の2時期にまとめられる。前者は、1930~40年に日本東方考古学会蒙古調査班と東方文化研究所の仏教学者長尾雅人氏による調査研究^{1), 2)}、1950年代の中国科学院建築歴史と理論研究所の張馭寰氏の現地調査による研究³⁾、1980年代の宿白氏の「藏伝仏教寺院考古」⁴⁾などが挙げられる。これらの研究成果は、それぞれの調査を行った時期の建物の姿を記録した貴重な資料であり、特に、永尾雅人氏と宿白氏は、初めて内モンゴルにおける寺院建築の平面構成、軸部などの考察を行なっている。しかし、それらは内モンゴルの中中部地域における数少ない寺院に限られ、内モンゴル寺院全体の特徴は明らかにされていない。また、後者は、菅沼晃氏の「モンゴル仏教紀行」⁵⁾、日本学術振興会外国人特別研究員包慕萍氏の「モンゴルにおける仏教建築の歴史的研究」^{6), 7)}と張鵬挙氏の「内蒙古藏伝仏教建築」⁸⁾などが挙げられる。特に「内蒙古藏伝仏教建築」では、初めて内モンゴルの全地域の寺院建築の実測調査を行い、建物の写真と図面を整理し、寺院建築の特徴を総括的に把握することがなされたものの、寺院建築の時代変遷などについての体系的な研究には至っていない。そして、残された寺院も研究活動の不足などの原因で、これらの歴史的な建造物の価値が社会に広く認められず、古い建築物が取り壊されてしまう例も多くみられる。このような現状から、内モンゴル寺院建築の各面での特異性を体系的に明らかにすることで、その価値を社会に周知することは急務である。そのため、本研究はまず寺院建設の際に欠かすことのできない伽藍の配置計画について研究する。

^{*1} 名古屋工業大学大学院社会学専攻 博士後期課程・修士（工学）^{*2} 名古屋工業大学大学院社会学専攻 准教授・博士（工学）^{*3} 名古屋工業大学 名誉教授・工博

Grad. Student, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, M.Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr.Eng.

Emeritus Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr.Eng.

現在内モンゴルに現存する、16世紀から19世紀まで約300年余りの間に建てられた寺院は約110件ある^{注3)}。そのうち各寺の伽藍配置図から寺院の創建時もしくは創建から間もない時期に建てられ、内モンゴル自治区の10の盟（日本の市に相当）と市に今もなお現存する30件の寺院を対象に分析を進める。その30件は、東部地域では通遼市、赤峰市の9件、中部地域ではフフホト市、シリントグ盟、ウランチャブ市の10件、西部地域はアラシャー盟、オールドス市、バヤンノール市、ボート市の11件である（Fig.1）。

研究方法としては、まず、当時の社会背景と歴史の変遷、各寺院の建設に関する歴史的背景などを明確にした上で、各寺院の寺格を把握する。次に、各建物の名称、機能、中に奉る仏像などをもとに、モンゴル寺院建築の種類を明確にし、建物の分類を行う。その分類をもとに、配置図のモデル化を行い、対象寺院の各伽藍配置を分析する。その上で、各型式の寺院に関連する建築の組み合わせ、寺院全体の特徴などを、寺格を考慮して比較考察することで、伽藍配置計画の型式分類及びそれらの特徴と地域性を明らかにする。

2. 寺院背景による寺格の判定

1578年にモンゴルのアルタン・ハーンはチベット仏教の改革派である黄派^{注4)}の高僧スナムギャムツォと会見し、彼にダライ・ラマの称号を捧げた。また、モンゴルでの寺院の建設、仏像や経典の招来及び経典の翻訳を約束し、チベット仏教のモンゴルへの伝播を法律によって正式に認めた。その後、チャハル部の首領トモンジャスグト・ハーン、ハルハ部のアバダイ・ハーン、オイラト部のハラフランなど、当時のモンゴルの各部の貴族たちが相継いで自分の所轄地域に莫大な資金を投入して寺院を建て、僧侶を育てた^{注5)}。こうしてチベット仏教はモンゴル人の中に広く伝わり、活仏と高僧の影響を通して、モンゴルの政治を左右することとなった。

17世紀初めに、チャハル部の新首領リンダン・ハーンも自分の影響力を強めるために、13世紀のフビライ・ハーンの時と同じく、チベット仏教の赤派^{注6)}を信仰し始めた。アルタン・ハーンが亡くなった後、モンゴルの東側に勢力を拡大した女真族が東部地域のモンゴルの貴族と手を組み、リンダン・ハーンの地位を脅かした。リンダン・ハーンはその圧力により西へ避け、1634年に病気で亡くなった。その後、チベット仏教の黄派は、アルタン・ハーンの影響が衰退したことにより、強い軍力を持つオイラト部のグーシ・ハーンに支持された。その結果、黄派はチベット仏教の最大の宗派となり、ダライ・ラマはチベット仏教のすべての宗派の最上位の指導者になった。

一方、清朝の創始者である女真族の首領ホンタイジは、チベット仏教の黄派を信仰し、「女真」を「満州」^{注7)}と改称し、モンゴル各部族の力を得るために、懐柔策の一つとして、モンゴルの寺院建設に資金、材料、職人、建築技術など各面での支援を行い始めた。例えば、中部地域の集宗寺は康熙30年（1691年）に、康熙皇帝が自らの指示のもと建設工事、配置計画、寺のラマの選抜と派遣まで行っていた^{注8)}。東部地域の会福寺は康熙45年（1706年）に、パーリン部の貴族ウルグン郡王に嫁いだ康熙皇帝の第三女固倫栄憲王女により築かれた寺院である^{注9)}。

18世紀の乾隆帝の治政から、モンゴルとチベットの全地域が相次いで藩部として清朝の支配に入り、モンゴル全地域はチベット地域と

Fig.1 The Map of Inner Mongolia

の政治的な隔離がなくなり、チベット地域の寺院建築の影響がモンゴル地域に広がると同時に、清朝の勢力もモンゴルの最西端まで及び、寺院建設にまで影響を与えた（Fig.2）。例えば、内モンゴル西部地域の延福寺は、雍正9年（1731年）に清朝の命により、アラシャー盟の貴族の王府として定遠營が建てられ、その王府の中に創建された寺院である。そして、モンゴルの最高格の活仏がチベット側から認定されていたが、清朝はその権力を自国に移し、政教合一のモンゴル社会に対する統括権を、宗教をもってさらに強化した。

この大きな歴史の変遷により、モンゴル地域に16世紀末からチベット仏教の黄派と赤派が浸透したが、最終的には黄派がモンゴル人の信仰する宗派となった。その結果、モンゴルの西部地域に現存する宗乗寺が内モンゴルにある唯一の赤派の寺院であり、他はすべて黄派の寺院である。そして、この赤派の宗乗寺は、黄派である延福寺の属院になっている^{注10)}。

清朝の行政区画は一般的に「国」の下に「省」があり、その下に「府」、「州」があり、さらに「県」がある。現在の内モンゴルとモンゴル国は、当時の清朝政府にそれぞれ「内属モンゴル」と「外属モンゴル」と命名され、どちらも清朝の「省」の行政区画の格と同等であった。「府」、「州」に相当する行政単位は「盟」（モンゴル語でアイムグ）、「県」に相当する行政単位は「旗」（モンゴル語でホシヨ）と命名され、現在まで内モンゴルやモンゴル国の行政区画の

Fig.2 The Map of China and Mongolia

名称として使われている^{注11)}。なお、内モンゴルは当時、清朝の「省」に相当する行政区画であったことから、本稿では「省」という行政区画の名称を内モンゴル全体の行政区画の名称として扱うこととする。

以上から、内モンゴルで最も格が高い寺院を「省格寺院」と定義し、内モンゴル寺院の格式を当時の社会背景と各寺院の地位により、寺格が高い順に「省格寺院」、「盟格寺院」、「旗格寺院」の三種に分ける (Table1)。

省格寺院は、主にモンゴルのハーンや清朝の皇帝により造営された寺院で、無量寺、延寿寺、彙宗寺、彙宗寺チャンキャ院の4つの寺がある。無量寺と延寿寺はアルタン・ハーンにより創建され、彙宗寺と彙宗寺チャンキャ院はそれぞれ清朝の皇帝により当時のモンゴルの最高格の活仏^{注12)}であるジェブツンダンバ活仏とチャンキャ活仏^{注13)}を優待するために創建された。

盟格寺院は、省格寺院と清朝の皇家寺院に属する寺院、盟の貴族により創建された寺院、格の高い活仏により創建された寺院、属寺を有する寺院など18件ある。この中の靈覺寺、普会寺、慶縁寺、法禧寺は延寿寺に、広覺寺は彙宗寺チャンキャ院に、梵宗寺是北京最大のチベット仏教寺院である雍和宮^{注14)}にそれぞれ属する。会福寺、広福寺、靈悦寺、法輪寺、福会寺、昌梵寺、宝堂寺、延福寺は各盟の貴族により、興源寺は格が高い活仏によって造営され、普和寺、鹹華寺、崇善寺は下に他の寺院を統括する寺院となっている。

旗格寺院は、長寿寺、法喜寺、宗乗寺、バダンジリン寺、福縁寺など盟格寺院に属する5件の寺院と、宝善寺、施善寺、載恩寺の3寺院の合計8件がある^{注15)}。

3. 寺院建築の分類

対象寺院の各建物は、創建当初から様々な修復や増改築の手が加えられていると考えられる。Table2は現時点で確認できる建造年を記した。ここに記した建物以外にも、建造年代が不明な現存遺構が存在する可能性はあるが、将来それが加わったとしても本稿の型式分類が大きく変わることはないと考ええる。

これらの対象の寺院建築は、名称、機能、中に安置する仏像などをもとに56種類に分類でき、さらに用途により、大きくI類仏像安置、II類宗教儀礼、III類付属建物の3類に分けられる (Table3)。

まず、第I類は仏像を安置することを目的とした建物であり、仏像は格が高い順に本尊、如来、菩薩、金剛、仏母、弟子、祖師、地方神、四天王、活仏となる。安置される仏像をもとに、建物は6種類に細分類できる。一種類目は大雄宝殿と仏殿など寺の最も重要な本尊を奉る建物、二種類目は寺院の本尊ではない如来と菩薩の仏像を奉る建物、三種類目は如来と菩薩の化身とも言われる金剛と仏母、及び弟子、祖師、地方神など次に格の高い仏像を奉る建物、四種目と五種目はそれぞれ寺院の敷地を守護する四天王を奉る天王殿と歴代の活仏を奉る活仏殿、六種目は中の仏像を判明できていない翼殿^{注16)}を含むその他の建物である。

第II類は説教、礼拝、儀式などの宗教儀礼を目的とし、誦経と仏教の学問を教授する建物である経堂と学殿、經典を保存する蔵經閣と伝經閣及びガンジュール殿とダンジュール殿^{注17)}、時報や儀式に使う鐘楼と鼓楼、礼拝に使う舍利塔と祠堂、以上4種類の建物からなる。

第III類は付属する建物で、敷地を守護する山門や楼門及び角楼、

接客や人を住ませる廂（庇）房や僧寮、そして物置としての配房と法物流通処及び倉庫、以上3種類の建物からなる。

4. 配置計画

寺格の判定と寺院建築の分類をもとに、各対象寺院の伽藍配置を類型化する。

まず、寺格により、省格、盟格、旗格の3種類に大きく分類できる。次に、建物の中で最も重要となる大雄宝殿、仏殿、経堂との関係により、細分類を行う。大雄宝殿とはモンゴル語で「ツォクチン・ドガン」と呼ばれ、「ツォクチン」とは経堂のことであり、「ドガン」は仏像を奉る建物のことである。仏殿は寺の本尊を奉る建物、経堂は寺院の僧侶が集まって読経する建物である。モンゴル寺院では、大雄宝殿とは、仏殿と経堂が一体となったものであり、仏殿と経堂が分離して独立する場合、その寺には大雄宝殿がない。これにより、仏殿と経堂が一体となった大雄宝殿のある寺院の型式を一体型、仏殿と経堂が分離した寺院の型式を分離型と定義する。この定義により、各対象寺院は一体型か分離型であるかという点から、分類することができる。さらに、建物の配置が軸線に沿って対称に配置されているか否かにより、対称型と非対称型に分類でき、寺格と寺院建築の種類などと合わせて7種類に分けられる (Table4)。そして、7種類の配置計画の特徴を明らかにするため、各寺院の配置図のモデル化を行う^{注18)} (Table5)。

4-1. 省格寺院

省格寺院は4件あり、すべての寺院は一体型の対称型であり、すべての建物が軸線に沿って左右対称に配置される。その中には、仏像の安置を目的とした建物、宗教儀礼を目的とした建物、その他の付属建物が備わっている。天王殿はすべての寺院に配置され、山門、鐘楼、鼓楼といった建物は4件のうち3件に備わっている。建物は軸線に沿って配置される中国の漢伝仏教寺院と同様、正面側には必ず山門もしくは天王殿が建ち、その後方の両側に鐘楼、鼓楼が左右対称に建ち、さらに後方に廂房が建つ (Table6)。同じ省格寺院の中でも時代により、願主が違うことから、配置計画が異なっている。モンゴルのハーンによって築かれた無量寺と延寿寺では、中央院の大雄宝殿の前方に菩提過殿を設け、その内部は軸線と平行して三室に分けられ、両端は仏像を安置し、中央は通路となり、通路の中に一つの大きなマニ車^{注19)}を置き、建物を通る人がそれを手で回転させる形式を備える。中央院の両側には、東院や西院など脇院を設け、中に如来や菩薩など格の高い仏像を安置する。無量寺と延寿寺はモンゴルの最も古いチベット仏教寺院であり、モンゴルにおけるチベット仏教の発祥地であるため、チベット語の經典の翻訳や印刷を行い、各地域への經典の発行所となっている。そのため、蔵經閣は極めて重視されており、大雄宝殿の後方に配置する。中央院の両側と脇院では、如来を奉る建物が金剛を奉る建物の前方に配置されている。そして、脇院の中央軸線上に建つ建物は中央院の両側に建つ建物と比べると、中に安置する仏像の格がより高くなり、脇院の中央軸線の位置は中央院の両側の位置より格が高いことが分かる。以上の無量寺と延寿寺に対して、清朝の皇帝よりモンゴルの活仏を優待するために後に築かれた彙宗寺と彙宗寺チャンキャ院では、菩提過殿や蔵經閣を設けておらず、比較的建物の種類と数が少ない配置計画となっている。

Table1 List of Temples Classified by Temple Level

No.	Temple Level 寺格	Temple Name 寺院名	Founding Year 創建年	Location 場所	Remarks 備考
1	Province Level 省格寺院	Ihezhaio Temple 無量寺	1578	Huhhot City in Middle Region 中部地域フフホト市	The Mongolian first tibetan buddist temple built by Altan Khan モンゴルのアルタン・ハーンにより築かれたモンゴル最初のチベット仏教寺院
2		Xiretzhao Temple 延寿寺	1581	Huhhot City in Middle Region 中部地域フフホト市	The temple where the Fourth Dalai Lama ascended the throne 4世・ダライ・ラマ即位した寺院
3		Hoh Temple 彙宗寺	1691	Xilingol League in Middle Region 中部地域シリンドル盟	The temple built by the Qing Emperor for Jetsun Dampa Khutukhtu ジェブツンダンバ活仏のために清朝から建設した寺院
4		Changkya Hoh Temple 彙宗寺チャンキヤ院	1701	Xilingol League in Middle Region 中部地域シリンドル盟	The temple built by the Qing Emperor for Changkya Khutukhtu チャンキヤ活仏のために清朝から建設した寺院
5	League Level 盟格寺院	Chaganbure Temple 梵宗寺	1743	Chifeng City in Eastren Region 東部地域赤峰市	The temple belongs to the Yonghe Temple 清朝雍和宮の属寺
6		Maidarzhao Temple 靈覺寺	1606	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	The temple belongs to the Xiretzhao Temple 延寿寺の属寺
7		Xiaramuren Temple 普会寺	1769	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	The temple belongs to the Xiretzhao Temple 延寿寺の属寺
8		Osutozhao Temple 慶縁寺	1606	Huhhot City in Middle Region 中部地域フフホト市	The temple belongs to the Xiretzhao Temple 延寿寺の属寺
9		Maritu Temple 法輪寺	1729	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	The temple belongs to the Xiretzhao Temple 延寿寺の属寺
10		Badgar Temple 広覚寺	1749	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	The temple belongs to the Changkya Hoh Temple 彙宗寺チャンキヤ院の属寺
11		East Huhger Temple 会福寺	1706	Chifeng City in Eastern Region 東部地域赤峰市	Built by Gulun Princess who is the Emperor Kangxi's third daughter 康熙帝第三女王固倫により築かれた
12		Batahalaga Temple 広福寺	1702	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	Built by the nobility of Halaha Mongols ハルハ部の貴族により築かれた
13		Fuhui Temple 福会寺	1679	Chifeng City in Eastern Region 東部地域赤峰市	Built by the nobility of Right Horchin Mongols コルチン右部の貴族により築かれた
14		Lingyue Temple 雲悦寺	1692- 1711	Chifeng City in Eastern Region 東部地域赤峰市	Built by the nobility of Right Horchin Mongols as a palae building コルチン右部の貴族により宮殿建築として築かれた
15		Maritu Temple 法輪寺	1745	Chifeng City in Eastern Region 東部地域赤峰市	Built by the nobility of Middle Horchin Mongols コルチン中部の貴族により築かれた
16		Merigen Temple 昌梵寺	1677	Baotou City in Western Region 西部地域バート市	The temple built by the nobility of Urat Mongols and it has 5 subordinate temples ウラト部の貴族により築かれ、5件の属寺を持つ
17		Zhungaarzhao Temple 宝堂寺	1623	Ordos City in Western Region 西部地域オルドス市	The temple built by the nobility of Jungaar Mongols and it has 18 subordinate temples ジュンガル部の貴族により築かれ、18件の属寺を持つ
18		Yamen Temple 延福寺	1731	Alxia League in Western Region 西部地域アラシャー盟	The temple built by the nobility of Hushuut Mongols and it has 11 subordinate Temples ホシュード部の貴族により築かれ、11件の属寺を持つ
19		Xingyuan Temple 興源寺	1649	Tongliao City in Eastern Region 東部地域通遼市	Built by the Jiasag Da Lama Khutukhtu who has actual control over local religion and politics 宗教と政治の権力を持っていたジャサグ活仏により築かれた
20		Xiaramuren Temple 普和寺	1758	Ulanqab City in Middle Region 中部地域ウランチャブ市	The temple manages some temples in central Inner Mongolia and Qinghai 中部地域と青海地域の部分寺を管理していた
21		Shaletew Temple 鹹華寺	1677	Bayannaer City in Western Region 西部地域バヤンノール市	The temple has 3 subordinate temples 3件の属寺を持つ
22		Beis Temple 崇善寺	1743	Xilingol League in Middle Region 中部地域シリンドル盟	The temple has 1 subordinate temple 1件の属寺を持つ
23	Banner Level 旗格寺院	Changshou Temple 長寿寺	1697	Huhhot City in Middle Region 中部地域フフホト市	The temple belongs to the Osutozhao Temple 慶縁寺の属寺
24		Faxi Temple 法喜寺	1725	Huhhot City in Middle Region 中部地域フフホト市	The temple belongs to the Osutozhao Temple 慶縁寺の属寺
25		Agui Temple 宗乘寺	1798	Bayannaer City in Western Region 西部地域バヤンノール市	The temple belongs to the Yamon Temple 延福寺の属寺
26		Badaijiren Temple バダンジリン寺	1755	Alxia League in Western Region 西部地域アラシャー盟	The temple belongs to the Yamon Temple 延福寺の属寺
27		Fuyuan Temple 福縁寺	1742	Tongliao City in Eastern Region 東部地域通遼市	The temple belongs to the Xingyuan Temple 興源寺の属寺
28		Balaqirude Temple 宝善寺	1665	Tongliao City in Eastern Region 東部地域通遼市	Built by the attendants of the Qing dynasty princess and the local Khutukhtu 旗の活仏とモンゴルに嫁になった清朝王女の従者により築かれた
29		Yangdu Temple 施善寺	1864	Xilingol League in Middle Region 中部地域シリンドル盟	Built by the local nobility 旗の王により築かれた
30		Han Temple 載恩寺	1671	Tongliao City in Eastern Region 東部地域通遼市	Built by the local Khutukhtu 旗の活仏により築かれた

Note: English names are transliterated if they cannot be translated.

注：英文の名称は意識できない場合、音訳している。

Table2 List of the Construction Year of Temples Building

Level	Temple Name	Founding Year	Building	Built Year	Remarks	Level	Temple Name	Founding Year	Building	Built Year	Remarks	
寺格	寺院名	創建年	建物	築年	備考	寺格	寺院名	創建年	建物	築年	備考	
Province Level 省格寺院	Ihezhaio Temple 無量寺	1578	Monastery Gate,Tianwang Hall,Bodhi-path Hall,Mahavira Hall,Sutra Pavilion,Puming Hall,Longevity Buddha Hall,Guhyasamaja Hall,Chakrasamvara Hall,III-Buddha Hall, Maitreya Hall 山門、天王殿、菩提過殿、大雄宝殿、藏経閣、普明殿、無量寿仏殿、密集金剛殿、勝楽金剛殿、三世仏殿、弥勒殿	1578	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の詳細な建造年代は不明	League Level 盟格寺院	Merigen Temple 昌梵寺	1677	Buddha Hall (Maitreya Hall), Assembly Hall 仏殿（弥勒殿）、経堂	1677	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Xiretzhaio Temple 延寿寺	1581	Shakyamuni Hall 釈迦殿	1581	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Zhungaarzhaio Temple 宝堂寺	1623	Buddha Hall (Shakyamuni Hall) ,Assembly Hall,Maitreya Hall,Padma Sambhava Hall 仏殿（釈迦殿）、経堂、弥勒殿、蓮花生殿	1623	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Hoh Temple 象宗寺	1691	Monastery Gate,Tianwang Hall,Mahavira Hall 山門、天王殿、大雄宝殿	1691	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Yamen Temple 延福寺	1731	Buddha Hall (III-Buddha Hall) 仏殿（三世仏殿）	1719	Since this temple was built on the previous temple, the building was built earlier than the Founding Year 本寺院は前の寺の上に創建された寺であり、建物の建造年は寺院の創建年より早い	
	Changkya Hoh Temple 象宗寺チャンキャ院	1701	Unknown 不明	Unknown 不明	The age of the existing old buildings is unknown 現存する古い建物の建造年代は不明				Assembly Hall 経堂	1731	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
League Level 盟格寺院	Chaganbure Temple 梵宗寺	1743	Tianwang Hall,Mahavira Hall,Maitreya Hall 天王殿、大雄宝殿、弥勒殿	1743	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	盟格寺院	Xingyuan Temple 興源寺	1649	Buddha Hall (III-Buddha Hall) 仏殿（三世仏殿）	1649	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Maidarzhao Temple 雲覺寺	1606	III-Buddha Hall 三世仏殿 Dharmapalas Hall (Yamantaka Hall) 護法殿(牛頭金剛殿) Tower Gate 樓門	1566 1585 1606	It is presumed that it was originally built as a palace building 最初は宮殿建築として創建されたと推測されている There is a record that it was expanded as a temple in this year, but no details are written, この年に寺院として増築されたという記録があるが、具体的などが書かれていない				Tianwang Hall,Assembly Hall,Avalokiteshvara Hall 天王殿、経堂、観音殿	1719		
	Xiamuren Temple 普会寺	1769	Mahavira Hall 大雄宝殿	1769	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Xiamuren Temple 普和寺	1758	Dharmapalas Hall 護法殿	1758	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Osutozhao Temple 豊緑寺	1606	Mahavira Hall 大雄宝殿	1606	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明				Exoteric Buddhism Hall 顕教学殿	1765		
	Maritu Temple 法禧寺	1729	Avalokiteshvara Hall 観音殿	1729	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明				Mahavira Hall 大雄宝殿	1801		
					Esoteric Buddhism Hall 密教学殿				1839			
	Badgar Temple 広覚寺	1749	Arira Hall,Dongkhor Buddhism Hall 舍利殿、時論学殿	1749	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	Beis Temple 崇普寺	1743	Shaletew Temple 鹹華寺	1677	Unknown 不明	Unknown 不明	The age of the existing old buildings is unknown 現存する古い建物の建造年代は不明
			Dharmapalas Hall 護法殿	1750				Assembly Hall 経堂	1743			
			Mahavira Hall 大雄宝殿	1757				Lamrim Hall 菩提道学殿	1801			
			Dongkhor Khutuktu Hall ドンクル活仏殿	1784				Exoteric Buddhism Hall 顕教学殿	1815			
			Agwa Hall 密呪学殿	1800				Esoteric Buddhism Hall 密教学殿	1907			
			Exoteric Buddhism Hall 顕教学殿	1835				Medical Hall 医学科	1916			
			Changkya Khutuktu Hall,Kangyur Khutuktu Hall チャンギャ活仏殿、ガンジュル活仏殿	1842				Dongkhor Buddhism Hall 時論学殿	1934			
			Tsongkhapa Hall ツォンカパ殿	1892								
	East Huhger Temple 会福寺	1706	Buddha Hall (Shakyamuni Hall) 仏殿（釈迦殿）	1706	It was further expanded in 1715-17261 1715-17261年にさらに大きく増築された	Banner Level 旗格寺院	Changshou Temple 長寿寺	1697	Mahavira Hall 大雄宝殿	1697	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
			Pantheon Hall,Siming Hall 戰神殿、司命神殿	1715-1726	The age of other existing old buildings is unknown		Faxi Temple 法喜寺	1725	Mahavira Hall 大雄宝殿	1725	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
			Assembly Hall 経堂	1762	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Agui Temple 宗崇寺	1798	Mahavira Hall 大雄宝殿	1798	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Batahalaga Temple 広福寺	1702	Tianwang Hall,Mahavira Hall,Kangyur Hall,Tengyur Hall 天王殿、大雄宝殿、ガンジュル殿、ダンジュル殿	1702	The age of other existing old buildings is unknown		Badajiren Temple バダジンリン寺	1755	Mahavira Hall 大雄宝殿	1755	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
			Exoteric Buddhism Hall 顕教学殿	1738	他の現存する古い建物の建造年代は不明		Fuyuan Temple 福縁寺	1742	Buddha Hall (III-Buddha Hall) 仏殿（三世仏殿）	1742	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
							Balaqirude Temple 宝善寺	1665	Dharmapalas Hall 護法殿	1689	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Fuhui Temple 福会寺	1679	Tianwang Hall,Longevity Buddha Hall,Assembly Hall,Buddha Hall (Shakyamuni Hall) ,Maitreya Hall 天王殿、無量寿仏殿、経堂、仏殿（釈迦殿）、弥勒殿	1679	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Yangdu Temple 施善寺	1864	Exoteric Buddhism Hall,Lamrim Hall,Mahavira Hall 顕教学殿、菩提道学殿、大雄宝殿	1864	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Lingyue Temple 靈悦寺	1692-1711	Buddha Hall (III-Buddha Hall) 仏殿（三世仏殿）	1743	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明		Han Temple 載恩寺	1671	Tianwang Hall 天王殿	1674	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明	
	Maritu Temple 法輪寺	1745	Buddha Hall (Shakyamuni Hall) 仏殿（釈迦殿）	1679	The reason why the building was built earlier than the Founding Year is unknown, but it is speculated that the temple was built on the ruins of the other temple. The age of other existing old buildings is unknown 寺院の創建年代より早い時期に建てられた理由は不明であるが、元朝の寺の廃墟の上に建てられたと推測されている。他の現存する古い建物の建造年代は不明				Buddha Hall (Avalokiteshvara Hall) 仏殿（観音殿）	1697		
Maritu Temple 法輪寺	1745	Tsongkhapa Hall ツォンカパ殿	1745	The age of other existing old buildings is unknown 他の現存する古い建物の建造年代は不明								
Note: The detailed name of each Buddha Hall is written in (). 注：（）に各仏殿の詳細名称を書いている。												

Table3 List of the Temple Buildings Classed by Function

N o.	Name 名称	Classification by Function 役割による分類	Subclassi- fication 細分類	Details 詳細	N o.	Name 名称	Classification by Function 役割による分類	Subclassification 細分類	Details 詳細	
1	Mahavira Hall 大雄宝殿		Honzon 本尊	Sakyamuni Tathagata, Maitreya Bodhisattva, Avalokiteshvara Bodhisattva, Padmasambhava, Yamantaka 釈迦牟尼如来、弥勒菩薩、観音菩薩、蓮花生祖師、牛頭金剛	28	Padma Sambhava Hall 蓮花生殿	For Enshrine the Buddha Statue 仏像安置	Vajra, Mother Buddha, Local Buddha, Disciple, Patriarch 金剛・仏母・地方神・弟子・祖師	Padma Sambhava 蓮花生祖師	
2	Shakyamuni Hall 釈迦殿			Shakyamuni Tathagata 釈迦如来	29	Tsongkhapa Hall ツォンカバ殿		Tsongkhapa ツォンカバ祖師		
3	III-Buddha Hall 三世仏殿			Kasyah Tathagata, Sakya Tathagata, Maitreya Bodhisattva 迦葉如来、釈迦如来、弥勒菩薩	30	Tianwang Hall 天王殿		Four Heavenly Kings 四天王	Tamon-Ten, Zochō-Ten, Jikoku-Ten, Komoku-Ten 持国天、増長天、広目天、多聞天	
4	Maitreya Hall (in the Case of the Honzon) 弥勒殿（本尊の場合）			Maitreya Bodhisattva 弥勒菩薩	31	Khutukhtu Hall 活仏殿		Khutukhtu 活仏	Khutukhtu of each temple 各寺院の歴代活仏	
5	Avalokiteshvara Hall (in the Case of the Honzon) 観音殿（本尊の場合）			Avalokiteshvara Bodhisattva 観音菩薩	32	Other その他		Unknown 不明	Unknown 不明	
6	Bodhi-path Hall 菩提過殿	For Enshrine the Buddha Statue ツォンカバ祖師	Tathagata, Bodhisattva 如来・菩薩	Pharmacist Tathagata, Guardian, Prayer Wheel 薬師如来、護法神、伝経筒	33	Assembly Hall 経堂	Chanting 説教・伝教		The Hall for daily chanting and important ceremony 毎日の勤行以外に主要な法会を行う殿堂	
7	Longevity Buddha Hall 無量寿仏殿			Wuliangshou Tathagata 無量寿如来	34	Exoteric Buddhism Hall 顕教学殿			The Hall for learnig Exoteric Buddhism 顕教学を学ぶ学殿	
8	Puming Hall 普明殿			Amitabha Tathagata 阿弥陀如来	35	Esoteric Buddhism Hall 密教学殿			The Hall for learnig Esoteric Buddhism 密教学を学ぶ学殿	
9	Pharmacist Hall 薬師殿			Pharmacist Tathagata 薬師如来	36	Dongkhor Buddhism Hall 時論学殿			The Hall for learnig Dongkhor Buddhism 時論学を学ぶ学殿	
4	Maitreya Hall 弥勒殿			Maitreya Bodhisattva 弥勒菩薩	37	Medical Hall 医学殿			The Hall for learnig Medicine 医学を学ぶ学殿	
5	Avalokiteshvara Hall 観音殿			Avalokiteshvara Bodhisattva 観音菩薩	38	Agwaa Hall 密呪学殿			The Hall for learnig Agwaa Buddhism 密成仏学を学ぶ学殿	
10	Ksitigarbha Hall 地藏殿			Ksitigarbha Bodhisattva 地藏菩薩	39	Lamrim Hall 菩提道学殿			The Hall for learning Bodhi Daoism 菩提道学を学ぶ学殿	
11	Dongkhor Hall 時論金剛殿			Dongkhor 時論金剛	40	Sutra Pavilion 藏経閣			Buddhist Sutras 經典	The Hall where the Buddhist Sutras are stored 經典を納める礼拝殿
12	Guhyasamaja Hall 密集金剛殿			Sandoi 密集金剛	41	Mani Pavilion 伝経閣				The Hall having prayer wheel that store the Buddhist Sutras 經典を納める伝経筒を奉る礼拝殿
13	Chakrasamvara Hall 勝楽金剛殿			Damchag 勝楽金剛	42	Tengyur Hall ダンジュル殿				The Hall where the Tangyur Buddhist Sutras are stored ダンジュル經典を納める礼拝殿
14	Dharmapalas Hall (Yamantaka Hall) 護法殿(牛頭金剛殿)	The Main Buddha is Yamantaka, other Buddha have Sandoi, Damchag, Hyangrwa, Green Tara, Maricideva, Baldanham, Yangchenma, Chagaan-Shuhuurt, Mahakala, Vaisravana 主に牛頭金剛、その以外は密集金剛、勝楽金剛、馬頭金剛、緑度母、光明仏母、吉祥仏母、妙音仏母、白傘蓋仏母、大黒天、毘沙門天	43	Kangyur Hall ガンジュル殿	The Hall where the Kangyur Buddhist Sutras are stored ガンジュル經典を納める礼拝殿					
15	Vajravarahi Hall 金剛亥母殿	Vajravarahi 金剛亥天母	44	Drum tower 鼓楼	Ritual 儀式		Notify the time and also used for ceremonies 時間の知らせ、儀式に使う			
16	Tara Hall 度母殿	Green Tara 緑度母	45	Bell Tower 鐘楼			Notify the time and also used for ceremonies 時間の知らせ、儀式に使う			
17	Chagaan-Shuhuurt Buddha mother Hall 白傘仏母殿	Chagaan-Shuhuurt Buddha mother 白傘仏母	46	Arira Hall 舍利殿	Worship 礼拝		Enshrine the Buddhist Relics 舍利を奉る			
18	Lakshmi Hall 吉祥天女殿	Lakshmi 吉祥天女	47	Arira Tower 舍利塔			Enshrine the Buddhist Relics 舍利を奉る			
19	Weituo Hall 偉陀殿	Weituo-Ten 偉陀天	48	Taihou Hall 太后殿			Ancestral Hall 祠堂			
20	Mammon Hall 財神殿	Vaisravana 毘沙門天	49	Monastery Gate 山門	For Protect the Site 敷地を守る		Exit and Entrance 出入口			
21	Pehar Gyalpo Hall 五王殿	Pehar Gyalpo 五王神	50	Tower Gate 樓門			Exit and Entrance 出入口			
22	Alka Big Hall アラシャ大殿	Alka Burhan アラシャ神	51	Corner Tower 角楼			Watchtower 望楼			
23	Guan-Yu Hall 関公殿	Guan-Yu 関公	52	Wing room 廂房	Associated Building 付属建物	For Living Room 生活用	Service Room 接客する			
24	Hasar Hall ハサル殿	Hasar ハサル戦神	53	Lama House 僧寮			Monk Dormiory 僧侶が住む			
25	Siming Hall 司命神殿	Siming Buddha 司命神	54	Supporting Houses 配房		For Storage 物置	For Storage used in ceremonies 儀式に使う物置用			
26	Pantheon Hall 戦神殿	Pantheon 戦神	55	Buddhist Items House 法物流通処	For storing Buddhist instruments 法物を置用					
27	Arhat Hall 羅漢殿	18 Arhat 18羅漢	56	Warehouse 倉庫	Warehouse 倉					

Note: English Names are transliterated if they can not be translated.
注：英文の名称は意識できない場合、音訳している。

Table4 List of Temples Classified by Arrangement Plan

Temple Level 寺格	Number 件数	Main Type 型式	Number 件数	Sub Type 細型式	Number 件数
Province Level 省格寺院	4	Integrated Type 一体型	4	Symmetric Type 対称型	4
League Level 盟格寺院	18	Integrated Type 一体型	9	Symmetric Type 対称型	7
				Asymmetric Type 非対称型	2
Banner Level 旗格寺院	8	Integrated Type 一体型	6	Symmetric Type 対称型	4
				Asymmetric Type 非対称型	2
		Separated Type 分離型	2	Symmetric Type 対称型	2

4-2. 盟格寺院

盟格寺院は18件あり、一体型の対称型、一体型の非対称型と分離型の寺院が確認でき、それらの配置計画を分析する。

4-2-1. 一体型の対称型

この型に属する寺院は7件あり、地域別にみると、西部地域の寺院が5件を占め、残りの2件は中部と東部地域にそれぞれ1件ずつである（Table7）。東部地域の梵宗寺を除くと、他の6件はモンゴルのハーンにより築かれた省格寺院との関係が強い。例えば、霊覚寺、慶縁寺、普会寺はモンゴルのハーンにより築かれた延寿寺の属院である。他の寺院も北京から遠く離れている西部地域に位置し、寺院建設の背景にも清朝との関わりはない。これらの寺院の配置計画に共通する特徴は多くあり、例えば、中央軸線に沿って格の高い建物が配置され、中央軸線より外側に行くに従って格の低い建物が自由に配置される。そして、如来、菩薩といった格の高い仏像を奉る建物は省格寺院より少ない。正面側に天王殿を持つ寺院は4件あるが、鐘楼と鼓楼は一切ない。活仏殿はすべての寺院に備わり、すべて大

雄宝殿から離れた位置に配置される。学殿を設ける寺院もみられる。廂房を設ける寺院は1件、僧寮を設ける寺院は2件ある。活仏殿、学殿と僧寮を設けることから、これらの寺院では、礼拝活動に加えて、仏教教義の教授活動も重視していることが分かる。東部地域に位置する梵宗寺の配置計画は省格寺院に近く、すべての建物が軸線に沿って対称に配置され、如来、菩薩、金剛、仏母、地方神、弟子といった仏像を安置する建物が7棟あり、正面側に天王殿が建ち、その後方の両側に鐘楼と鼓楼が左右対称に建つ（Table8）。梵宗寺が省格寺院と同等の格式を持つ理由は、清朝雍和宮の属院であり、清朝から支援を受けていたためと考えられる。

4-2-2. 一体型の非対称型

この型に属する寺院は、中部と西部地域にそれぞれ位置する普和寺と広覚寺の2件である。この2件では、学殿と活仏殿が備わるチベット地域の配置計画のように、山腹の地勢に沿って軸線と関係なく、建物が非対称に自由に配置される。そのため敷地を囲む塀と出入り口である山門や天王殿を設けない（Table9）。そして、大雄宝殿、護法殿と活仏殿以外に仏像を安置する建物もみられない。一方で、学殿が両寺院ともにみられ、周辺に僧寮や倉庫がある。この2件は学問寺^{注20}としての属性が強く、各学問の教授を重視するためにこのような特徴があると考えられる。そして、両寺院ともに、大雄宝殿と顕教学殿が前方に建ち、活仏殿が大雄宝殿から離れた敷地の奥に建つ。このように、建物の格の高い重要な建物を正面側に建てることは、寺の権威を誇示するためであり、活仏殿を奥に建てることは活仏の勤行に専念するためと考えられる。

4-2-3. 分離型

この型に属する寺院は9件あり、地域別にみると、西部地域に3件、中部地域に1件、東部地域に5件ある（Table10）。西部地域の宝堂寺と昌梵寺以外の7件では、省格寺院と同じく、すべての建物が軸線に沿って左右対称に整然と配置され、必ず周囲を塀で囲み、天王殿が正面側に、後方に鐘楼と鼓楼が左右対称に配置される。こ

Table5 Legend of Model Figure Created by Arrangement of Temples

<p>第一種類</p> <p>仏像を安置</p> <ul style="list-style-type: none"> 本尊 如来・菩薩 金剛・仏母・弟子 祖師・地方神 天王 活仏 その他・不明 <p>第二種類</p> <p>宗教儀礼</p> <ul style="list-style-type: none"> 説教・伝教 經典を保存 儀式用 礼拝用 <p>第三種類</p> <p>付属</p> <ul style="list-style-type: none"> 敷地を守護 生活用 物置 <p>凡例</p>	<p>無量寺</p> <p>一体型・対称型</p>	<p>廣覚寺</p> <p>一体型・非対称型</p>	<p>会福寺</p> <p>分離型</p>
---	---------------------------	----------------------------	-----------------------

以下のすべて表の凡例はTable4を参照。

Table6 Model Figure of Province Level Temples

Table7 Model Figure of League Level / Integrated / Symmetric Type Temples

Table8 Model Figure of League Level / Integrated / Symmetric Type Temple

Table9 Model Figure of League Level / Integrated / Asymmetric Type Temples

Table10 Model Figure of League Level / Separated Type Temples

の7件すべてにおいて、中央軸線及び軸線の左右に格の高い仏像である如来と菩薩が安置され、金剛、仏母、弟子、祖師、地方神といった次に格の高い仏像を安置する建物が軸線の左右に配置されており、省格寺院に近い傾向がある。このうち、中部地域にある崇善寺のみ活仏殿と学殿が配置され、学問寺としての特徴も現れている。しかし、西部地域の宝堂寺と昌梵寺の配置計画は他とは異なり、主要な建物だけが軸線に沿って配置され、軸線より外側に行くに従って格の低い建物は自由な配置となっている。この2件では、敷地を囲む塀と山門や鐘楼と鼓楼はなく、活仏殿が大雄宝殿から離れた位置に配置され、一体型の多くの盟格寺院の配置型式と類似している。以上から、この2件は、アルタン・ハーンやチベット地域の寺院建築の影響を受け、他の7件は主に清朝の影響を受けて造営されたと

考えられる。特に東部地域において、省格寺院と同じく格式が高い寺院が造営されたのは、清朝の財力、人力の支援があったことと、盟の貴族が自らの地位を誇示するために寺院建設に大きな力を入れていたことに起因すると考えられる。

4-3. 旗格寺院

旗格寺院は8件あり、一体型の対称型、一体型の非対称型と分離型の寺院が確認でき、それらの配置計画を分析する。

4-3-1. 一体型の対称型

この型に属する寺院は4件あり、地域別にみると、中部地域に3件、東部地域に1件ある。同型の盟格寺院と同じく、主要な建物が軸線に沿って配置され、両側に厢房、翼殿と僧寮が左右対称に配置され、寺院全体が塀で囲まれ、山門が正面側に設けられる。しか

Table11 Model Figure of Banner Level / Integrated / Symmetric Type Temples

し、如来と菩薩を安置する建物及び鐘楼、鼓楼はない。金剛を安置する建物を持つ寺院は宝善寺のみで、天王殿を持つ寺院は長寿寺のみ、活仏殿と学殿を持つ寺院は施善寺のみとなっており、同型の盟格寺院より建物の数と種類は少ない（Table11）。

4-3-2. 一体型の非対称型

この型に属する寺院は2件であり、チベットから近い西部地域に位置する宗乗寺とバダンジリン寺である（Table12）。同型の盟格寺院の配置計画と同じく、すべての建物が地勢に沿って自由に配置され、大雄宝殿が正面側に、活仏殿がその奥に離れて建ち、敷地を囲む塀と山門、天王殿、鐘楼と鼓楼、如来と菩薩を安置する建物はない。しかし、旗格寺院では、学殿が省略され、僧寮と倉庫はいずれか1棟のみとなっている。一般的に、寺格が下がると寺の財力も下がり、建物数と種類も少なくなる。例えば、盟格寺院の延福寺属院の旗格寺院であるバダンジリン寺では、大雄宝殿、活仏殿、伝経閣と僧寮だけが配置され、金剛を安置する建物が省略されている。しかし、同じ延福寺属院の旗格寺院である宗乗寺では、大雄宝殿、活仏殿が配置される以外に、異なる金剛を安置する建物が4棟もある。これは、赤派寺である宗乗寺は、黄派である盟格寺院の属院として旗格寺院となったが、創建当初からの格式高い配置計画の特徴が残されたためと考えられる。

4-3-3. 分離型

この型に属する寺院は2件であり、東部地域に位置する。同型の盟格寺院と同様に、すべての建物が軸線に沿って配置される。正面側に天王殿や山門が、両側に鐘楼と鼓楼がそれぞれ配置され、その後方に両寺院とも羅漢殿と護法殿が左右対称に配置される（Table13）。分離型の寺院では、寺格が下がることにより、如来と菩薩を安置する建物が省略されるが、東部地域の寺院にはあまり配置されない活仏殿が備わっている。

5. 結論

本稿では、内モンゴルにおける30件のチベット仏教寺院の寺格と建物の種類を分析し、各寺院の配置計画を考察した。具体的には、まず、モンゴル寺院建設に至る当時の大きな社会背景と各寺院の沿革の分析により、各寺院の寺格を省格、盟格、旗格の三格に分類した。次に、各建物の機能、重要度、立地等をもとに56種類に分類し、さらに安置される仏像の重要度と機能の違いにより、大きく3種類に分類した。さらに各寺院の伽藍配置のモデル化を行い、それをもとに、一体型、分離型、対称型、非対称型に分け、寺格と合わせて7種類に整理して、各種類の寺院の配置計画の比較分析を行っ

た。その結果、多種多様な内モンゴル寺院の配置計画の特徴を詳細に分析することができた。その特徴をまとめると以下の通りとなる。

- i. 最も格式の高い省格寺院は、当時のモンゴルの政治の中心であった中部地域に位置する。省格寺院はすべて一体型の対称型の寺院であり、棟数が多く、多種多様な建物がある。中でも、格の高い如来・菩薩・金剛を安置する建物が多く確認できる。敷地の前方に必ず天王殿が建ち、その後方の両側に鐘楼と鼓楼が左右対称に建つ。これは漢伝仏教寺院の特徴と同様である。省格寺院のうち、モンゴルのハーンによって築かれた寺院はモンゴル地域の仏教の発祥地となったため、清朝の皇帝により築かれた寺院と比べると、菩提過殿と藏経閣を大雄宝殿の前後に配置するなど配置計画が異なり、より格式が高いといえる。
- ii. 盟格寺院と旗格寺院は東部、中部、西部地域に分散し、一体型の対称型、非対称型、分離型の三型の寺院が確認でき、各型で配置計画は大きく異なっている。基本的に、同じ型でも寺格が下がることにより、建物の数と種類が減る傾向があるが、盟格寺院の梵宗寺と旗格寺院の宗乗寺は、それぞれ寺院背景と宗派が異なるため、建物が省略されることはなかった。

盟格寺院の18件のうち、9件は一体型であり、残りの9件は分離型である。そのうち、一体型の多くは対称型である。梵宗寺以外の一体型の寺院では、多くの建物が省略され、特に、一体型の非対称型の寺院では、山門、天王殿、鐘楼、鼓楼、如来と菩薩を安置する建物及び敷地を囲む塀まで省略されている。一方、活仏殿と学殿を必ず設け、すべての建物が地勢に沿って自由に配置されるチベット寺院の特徴がみられる。しかし、盟格寺院の中の分離型の寺院は省格寺院と比べて、建物が省略されることはなく、如来や菩薩を安置する格の高い建物もみられ、すべての建物が軸線に沿って左右対称に配置されている。

旗格寺院の8件中6件は一体型の寺院で、そのうち、対称型の寺院は4件確認できる。旗格寺院は盟格寺院に比べ、如来や菩薩を安置する格の高い建物は一切設けず、宗乗寺以外の寺院では金剛を安置する建物も省略されることが多く、建物の数と種類は省略されている。

- iii. 地域性では、まず清朝の首都であった盛京（瀋陽）と京師（北京）から近い東部地域は漢伝仏教寺院の影響を受けたことにより、主に分離型の寺院であり、建物が整然と並び、安置する仏像も多種多様である。そのうち、格の高い仏像を奉る建物、山門、天王殿、鐘楼、鼓楼を設けることが多い。

次に、チベットから近い西部地域では、チベット地域における

寺院の配置計画のように、建物が地勢に沿って配置される非対称型の寺院が多い。建物として山門、天王殿、鐘楼と鼓楼を一切設けず、如来と菩薩を奉る建物も少なく、その代わりに学問を教授する学殿と活仏殿を配置する。

中部地域では、主に一体型の対称型の寺院があり、主要な建物は東部地域の寺院と同様に、軸線に沿って左右対称に配置されるが、軸線より外側に行くに従い格の低い建物が自由に配置されることが多い。特に、盟格寺院と旗格寺院では、西部地域と同じく、天王殿及び鐘楼と鼓楼が省略され、代わりに学問を教授する学殿と活仏殿が配置されることが多い。中部地域はモンゴルのチベット仏教寺院の発祥地であったが、東部地域と同じく漢伝仏教寺院の配置計画をもとに、西部地域と同じくチベット地域の寺院の配置計画の影響を受け、両者を折衷した配置計画の特徴が多くあることが分かる。

- iv. 以上のとおり、内モンゴルにおける仏教寺院は寺格と地域の差により、寺院の配置計画が異なり、多種多様な型式を持つ寺院が生まれたが、本稿における各型の比較分析により、内モンゴル寺院の配置計画の特異性や寺格及び地域性による特徴を明らかにすることができた。今後、関連寺院建築のより詳しい調査を行い、内モンゴルにおける各寺院建築の時代変遷に関する史料を収集し、本研究の成果をもとに、内モンゴルにおけるチベット仏教寺院の編年論及び宗教哲学、さらに立地条件等の外的要因と空間配置との関係についても研究したい。

参考文献

- 1) Toa Archaeology Society Mongolian Survey Group: Notes of the Mongolian Plateau Crossing, Asahi Shimbun Press, 1945, Tokyo (in Japanese)
東亜考古学会蒙古調査班：蒙古高原横断記，朝日新聞出版社，1945
- 2) Gajin Nagao: Mongolian Academic Temple, Chuko Bunko, 1992.2 (in Japanese)
長尾雅人：蒙古学問寺，中公文庫，1992.2
- 3) Zhang Yuhuan: Inner Mongolian Ancient architecture, Tianjin University Press, 2009.9 (in Chinese)
- 4) Su bai: Archaeology of Tibetan Buddhist Temple, Cultural Relics Press, 1996.10 (in Chinese)
- 5) Akira Suganuma: Mongolian Buddhist travelogue, Shunmei Sha, 2004.4 (in Japanese)
菅沼晃：モンゴル仏教紀行，春明社，2004.4
- 6) Bao Muping: A Comprehensive Survey of Buddhist Temples at Western Inner Mongolia: A Study on the History of Mongolian Buddhist Architecture (Part 1), Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-2, pp.193-194, 2007.7 (in Japanese)
包慕萍：内モンゴル西部の仏教寺院に関する悉皆調査 モンゴルにおける仏教建築の歴史的研究 その1，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2 分冊，pp. 193-194，2007.7
- 7) Bao Muping: The Process for Establishment of Buddhist Temple Ushin Dzuu and Its Spatial Structure: A Study on the History of Mongolian Buddhist Architecture (Part 2), Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-2, pp.195-196, 2007.7 (in Japanese)
包慕萍：仏教寺院ウシン・ジョーの建設と空間構成 モンゴルにおける仏教建築の歴史的研究 その2，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2 分冊，pp. 195-196，2007.7
- 8) Zhang Pengju: Inner Mongolian Tibetan Buddhist Architecture (I), (II), (III), China Architecture & Building Press, 2012.12 (in Chinese)

注

- 注1) 張馭寰：内蒙古建築，天津大学出版社，pp.1-9，2009.9
- 注2) ラソロン：大慈寺—ハンハルワ，内蒙古文化出版社，pp.2-31，2013.12
- 注3) 張鵬挙：内蒙古藏伝仏教建築（上冊），中国建築工業出版社，pp.6, 2012.12
- 注4) 黄派：チベット仏教のツォンカバ祖師の教えを守る改革派であるゲルク派のことで、黄色の僧帽を用いたため、モンゴルで黄派と呼ばれる。
- 注5) 賽音朝格図：北元末期の大汗，内蒙古文化出版社，pp. 104-124, 2014.7
- 注6) 赤派：チベット仏教のニンマ派，サキヤ派など旧教派のこと。赤色の僧帽を用いたため，モンゴルで赤派と呼ばれる。
- 注7) 「満州」という名称について清朝の皇帝の意志により書かれた「満州源流考」に、仏教のことが多く書かれていることから、仏教のマンジュシリ（文殊菩薩のこと）に漢字を与えた名称である可能性が高いと考える。
- 注8) 張鵬挙：内蒙古藏伝仏教建築（中冊），中国建築工業出版社，pp.454, 2012.12
- 注9) 張鵬挙：内蒙古藏伝仏教建築（下冊），中国建築工業出版社，pp.91, 2012.12
- 注10) 張鵬挙：内蒙古藏伝仏教建築（上冊），中国建築工業出版社，pp.171, 2012.12
- 注11) 宮脇淳子：モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで，刀水書房，pp.219-220, 2002.10
- 注12) 活仏とは、モンゴル語で「ホドクト」、「ゲゲン」、「ホビルガン」とも呼ばれる。チベット仏教の教義において存在する特殊な制度の中、衆生を教え導くために、如来、菩薩、過去の偉大な仏道修行者の化身（応身）のことを指し、「活仏」と呼ばれる。活仏は社会的な制度として確立しており、仏の化身であると同時に、清朝の時代には大きな政治的権力を有していた。
- 注13) ジェブツンダンバ活仏とチャンキヤ活仏：チベットのダライ・ラマとバンチェン・ラマの次に、チベット仏教圏に最高格の活仏として尊崇されている。特にチャンキヤ活仏は清朝より「ジャサク・ラマ」の称号を賜り、北京の雍和宮などの管理を命じられていた。
- 注14) 雍和宮：雍和宮是北京最大のチベット仏教の皇家寺院である。もとは雍正の即位前の住居であり、即位後半分がチベット仏教寺院、半分が離宮となり、雍正3年（1725年）に雍和宮と改称され、乾隆9年（1744年）に、正式にチベット仏教寺院とされた。内モンゴルの最高格の活仏であるチャンキヤ活仏はこの寺の主持となっていた。そのため、雍和宮に所属する内モンゴルの寺院の格は他の省格寺院に所属する寺院の格と同じく高いと考えられる。
- 注15) 省格、盟格、旗格寺院の判定は主に張鵬挙氏の「内蒙古藏伝仏教建築（上冊），（中冊），（下冊）」に書かれている各寺院の背景についての内容を参考した。
- 注16) 翼殿：モンゴル語で「ジグリン・ドガン」と呼ばれる建物のことであり、翻訳すると「翼殿」になる。「配殿」とも翻訳することがあるが、漢伝仏教寺院に「伽藍殿」と「祖師殿」を指す「配殿」と区別するために「翼殿」といった名称を本稿では用いる。
- 注17) ガンジュール殿とダンジュール殿とはそれぞれチベット仏教の大蔵経の律・経蔵であるガンジュール経典と論蔵であるダンジュール経典を保存する建物。
- 注18) 各寺院の伽藍配置を表示するモデル図は主に張鵬挙氏の「内蒙古藏伝仏教建築（上冊），（中冊），（下冊）」、長尾雅人氏の「蒙古学問寺」、菅沼晃氏の「モンゴル仏教紀行」などの文献に掲載されている各寺院の配置図を参考にして作成。
- 注19) マニ車：モンゴルやチベットでは「マニコロ」とも言い、中国語では「伝経筒」のこと。マニはサンスクリット語の如意宝珠の略で、コロはチャクラの意味である。マニ車は、中に仏教の経典を印刷した巻物を筒に納め、手で回転させることを、経典を読むことと同様に考え、礼拝することに繋ぐ機能を持つ。
- 注20) 学問寺：他の寺院と同様に、宗教の礼拝動行を行うが、同時に学府としての頭教学、密教学やその他の数個の学部よりなるものであり、学問の教授を重視する寺のこと。長尾雅人氏の「蒙古学問寺」のpp.55-57を参考とした。

SANGAHARAMA ARRANGEMENT PLAN OF INNER MONGOLIA BUDDHIST TEMPLE

ENKE HAORIBAO^{*1}, *Yoshinori NATSUME*^{*2}, *Shinichi HAMADA*^{*2},
and Kazuyoshi FUMOTO^{*3}

^{*1} Grad. Student, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, M.Eng.

^{*2} Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Socio Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr.Eng.

^{*3} Emeritus Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr.Eng.

Since BC, cities have been constructed on the Mongolian Plateau with the establishment of dynasties, but most turned to ruins. However, the Tibetan Buddhist temples built after the 16th century, which are an indispensable element in the process of Mongolians settling down from nomadic life, have been relatively well preserved in Inner Mongolia. These temples are considered the epitome of the Mongolian economy, culture, art, and construction technology of the time. Therefore, there is great value and significance in researching them systematically. Interestingly, these temples originated from Inner Mongolia, the southern part of Mongolia. The architectural design of these temples has been largely influenced by Chinese and Tibetan temple architecture and is therefore considered an important sample for studying temple architecture in both Mongolia and East Asia. Yet, there is still no systematic study on this subject. Therefore, the purpose of this research is to study the arrangement plan, which is the most important aspect in the design and first stage of temple construction of Inner Mongolian Tibetan Buddhist temples.

In this study, 30 well-preserved temples, that were constructed between the end of the Northern Yuan Dynasty and the Qing Dynasty were selected as the object of this research. Firstly, the temples were divided into different levels according to the historical background of the temples. Further, the temple buildings were also classified based on their functions. Lastly, the arrangement plan has been modeled, which was also classified into a series of different types to further clarify the characteristics of the arrangement of the Inner Mongolian Buddhist temples.

Results-wise, this study suggests that these temples could be divided into three levels: Province Level, League Level, and Banner Level. Furthermore, there were 56 kinds of temple buildings among these 30 temples, which were divided into 3 types according to their functions. In accordance with the main buildings among the 56 classifications, the arrangement form of the temple has shown to be divided into Integrated Type and Separated Type. Importantly, Integrated Type could be divided into more detailed types like Symmetric Type and Asymmetric Type. The characteristic arrangement plans of these temples in different regions have been clearly found through a comparative analysis of each level's temple arrangement of various types. Surprisingly, the reason behind the characteristics has been initially discovered during this study.

In conclusion, this study presents a classification of arrangement characteristics of Buddhist temples of Inner Mongolia, based on arrangement plans in a variety of temples in Inner Mongolia. Finally, this research also provides a foundation for further studies on Mongolian temple architecture.

(2021 年 4 月 7 日原稿受理, 2021 年 7 月 28 日採用決定)